

身体的主体としての人間とは誰のことなのか

ドロテー・ルグラン¹⁾

(樋口聡訳)

(2015年1月5日受理)

Who is the Human Being as a Bodily Subject?

Dorothee LEGRAND

(translated by Satoshi HIGUCHI)

I consider what constitutes the human being as a bodily subject. Against any conception of a subject as embodied only in a contingent or secondary manner, contemporary research in neurosciences, cognitive sciences, psychology, anthropology, philosophy invigorate the view that the body participates constitutively to subjectivity: being a subject requires being a body, inescapably. This voice, however, is heard in various ways and the term ‘body’ ends up holding contrastive meanings. Hence the question: What does constitute bodily subjectivity? Is it neural maps of the body, cognitive representations of the body, conscious experiences of the body, bodily practices? While focusing on the bodily subject, the phenomenological approach mostly pushes materiality in the background – like a reader privileges meaning over its materialization in letters. Such view has thus forcefully and convincingly defended that one’s body is not reducible to mere materiality. It is however just as important to underline that one’s body is just as much irreducible to subjectivity, as it wouldn’t be a body without its materiality. If it is accepted that the subject is bodily, and that the body is material, the question arises, how does materiality participate in subjectivity? To address this question, I consider the structure of self-experience from a phenomenological point of view, and ask: how can the subject be experienced without being reduced to the material body and without being separated from the material body? I propose that bodily self-consciousness goes beyond the skin boundary of the body proper, as it corresponds to the experience of the world as disclosed by the body. At a primary level, self-experience is thus given by the subject’s relation to otherness. I conclude by considering how this view may shed light on the subject’s relation to others, and on the consequences of the rupture and restoration of such intersubjectivity in psychopathological cases.

Key words: Subjectivity, Materiality, Otherness, Phenomenology, - Psychopathology

キーワード：主体性，物質性，他者性，現象学，精神病理学

1. 身体的主体性

本研究の目的は、身体的主体としての人間を構成するものは何であるのか、についての理解を進めることである。身体的なものとしての主体などは偶然的で二義的なものという見方に対して、脳科学、認知科学、心理学、人類学、哲学における最近の研究は、身体は

主体性に本質的に関わっているという見方を強めている。主体であるということは、必然的に、身体であることを求めるのである。しかしながら、そのような言い方はいろいろな形で耳にするものであり、「身体」という用語は結局、対照的な意味を持つにすぎないことになってしまう。したがって、身体的主体性を規定するものは何であるかと問わなければならない。それ

1) フランス国立科学研究センター

は、身体の神経図なのか、身体の認知的表象なのか、身体の意識的経験なのか、身体的実践なのか。

身体的主体性についてのすぐれた現象学的説明は、Merleau-Pontyによってなされている。彼にとっては、「私は私の身体と向き合うことはない、私は身体の中にあり、あるいはむしろ私は身体である」(1962: 150 [1945])。彼の見方においては、「自分自身の身体についての経験は、主体と対象を互いに分離させる反省的方法とは対立する」(Ibid.: 198-9)。

身体そのもののそのような「両義的な」様相を強く主張するにもかかわらず、Merleau-Pontyは、「われわれが動かすのはわれわれの对象的身体ではなく、われわれの現象的身体である」と言う(Ibid.: 106)。つまり、「生きている」身体('living' body)と「生きられた」身体('lived' body)をはっきりと区別するのである。この区別は、Henryによって、分離(dissociation)として極端に解釈された。「われわれの身体は、もともと、生物としての身体でもなければ、生きた身体でもなく、人間の身体でもない。それは、絶対的主体性の領域という根本的に異なる存在論的領域に属すものなのである」(1975: 8 [1965])。この見方は、「主体的身体」を非物質化するという問題をはらんでおり、それゆえに主体的身体は、ただ「比喩的な」意味において身体的だと見なされるだけになってしまう(Barbaras 2008: 9)。

そうした見方は、身体的主体に焦点化しつつも、物質性を背景に押しやることになる。文字による物質化を越えた意味を重要視する読者のように、である。それゆえ、身体は単なる物質性に還元できないということが強く主張されてきた。しかしながら、身体は主体性に完全には還元不可能であるということを強調することも、重要である。というのは、物質性がなければ身体ではないだろうからである。主体が身体的で、身体は物質的であるとすれば、物質性はいかに主体性に関与するののか、という問いが生じることになる。さらに理解されるべきことは、HusserlがLeibkörperという概念で最初に把握しようとしたものである(1989: 144 [1952])。そこでは、身体は単なる物質的なもの(Körper)として主体的な身体(Leib)によって経験される。それがLeibkörperである。示されなければならないのは、いかにして「われわれの生きられた身体は、われわれの生きている身体の現れなのか」ということである(Thompson 2007: 237)。その物質性によって、身体が主体性に関わるのはいかにしてか。

そのような問いは、Levinasの物質性の哲学によって与えられる。彼は、初期の著作で、主体は物質であることを避けることはできないという。「その存在者の位置のために支払われる対価は、それ自身をそれ自

身から引き離すことができないという、まさにその事実の中にある…それ自身によって占められているというあり方が、主体の物質性なのである」(1987: 55 [1947])。また、Levinasは、彼の中心的な著作で、「生きられた身体と物質的な身体といった、和解が図られるべき二重性」など存在しないと言う(1969: 165 [1961])。そして、後期の著作全体に渡って「物質としての肉と血の主体性」といった観念を用いることになるのである。

2. 主体と対象

そのような身体的主体性についてのわれわれの知を、どのように増やすことができるだろうか。現象学の視点から経験の構造について議論するとき、重要な出発点は、主体と対象という二つの不可分の経験の極の区別である(Legrand 2007b, 2007c; Legrand 2011b)。鏡に映った自分の像を見るというありふれた経験も、自己についての複合的で、他のものに替えることのできない経験を含んでいる。われわれは、経験する主体として自分自身を経験する。その経験する主体は、「ここ」や「そこ」から眺める主体であり、同時に、その像が見られるように、自分自身を経験される対象として経験する。

この経験の主体と対象の区別は、精神(mind)と物質(matter)の区別と直交の関係を持つ、ということ想起することは重要である。言い換えれば、ここでの「主体」は「精神的な自己」を意味しているのではないし、「対象」は「物質的な事物」を意味するのではないのである。そうではなく、「主体」は「経験する人」であり、「対象」は「経験されるもの」を意味する。この意味で、ここでの「対象」という語は、経験されるものとしての対象、の縮小語であり(私は、「経験されるものとしての対象」という言い方がくどすぎて煩わしい感じを与えるとき、それを避けるために、できるだけ「対象」という語を使う)、「事物」と同義と捉えられるべきではない。これらの用語のこのような使い方のように、事物とは、生きた有機体ではない、具体的で限界を確定された項であり、対象とは主体が経験するものである。テーブル、本、カップ、車は事物であり、あなたの隣人や馬は事物ではない。テーブル、本、カップ、車だけでなく、あなたの隣人、馬、麻薬による幻覚、日の出、先祖の魂などもまた、すべて対象たりうる。すなわち、主体であるあなたが経験することができるものである。

経験の主体と対象の区別は、構造的であり、それゆえに、人が意識する何かとは関係がない。あなたは自

分の車をすばらしいと経験するか否か、隣人の馬をくさいと経験するかどうか、幽霊を親しみやすいと経験するかどうか、さまざまな対象についてのこれらの経験の共通点は、経験する人としてのあなた、経験する主体である。

図式的に（とても単純な図式として）見れば、志向的な意識は、一本の矢と考えることができるだろう。主体が出発点であり、対象が到達点である。これらの出発点、到達点がなければ、端的に、矢は存在しない。同様に、主体と対象の両者を欠いたいかなる志向的な意識も、存在しないのである。

さらに、構造的には、出発点における主体は、たとえ、志向的な意識という矢が自分自身に焦点を合わせたとしても、到達点における対象にはなりえない。対象としての自己についての洗練された意識は、主体としての自己に接近するのには十分ではない。これは、構造的不可可能性であり、個人的な能力の欠如ではない。

言いかえれば、主体は知識の対象には還元されえないのである。したがって、身体についての知は、その相関性だけでなく、主体としての身体と対象としての身体の一一致不可可能性も含んでいる。「それは誰」ということについて、自己あるいは他者を内省、観察、探究の対象として、科学的、芸術的あるいはその他の方法で、多くのことが知られる。しかしながら、身体についてのそのような知識がいかに洗練されたとしても、主体としての身体は対象として提示されることはありえないがゆえに、「絶えず問題にされない箇所が残る」(Zahavi) のである。しかし、私は、その問題にされない箇所は不可視の点ではないと考える。というのは、主体としての身体は、特に、前反省的で、目的語を持たない自動詞的な仕方、広く存在しているからである。本論文では、この点を明らかにしたい。

3. 対象—自己についての知識は、主体—自己に到達しない

われわれは身体的主体性をいかに知りうるか。二重の論点があり、肯定的には、身体的主体性の固有性 (specificity) には到達可能であり、否定的には、身体的自己を知識の対象とするだけでは、身体的主体性の固有性には到達できない。否定的な論点から考えてみよう。

身体的自己を知識の対象とするだけでは身体的主体性の固有性には到達できないという考え方は、重要な認識論の帰結から来ている。すなわち、どのような科学的方法にも、いかにそれを洗練させたとしても、知識の対象に対しては構造的な限界があるのである。

認知脳科学、哲学、発達心理学、精神医学では、自己は、多くの場合、対象—自己（と私が呼ぶもの）として性格付けられている。すなわち、別の内容の情報に対比される特定の内容の情報（私の顔—他人の顔、私の名前—他人の名前、私の性格—他人の性格・・・）として捉えられているのである。自己についてのそのような見方の妥当性は明らかである。他者に関わる情報の内容から自己に関わる内容を区別することができるのが確かに重要であり、自己表象の内容への感受性が行動の重要な予測変数なのである。

しかしながら、対象—自己は、自己か他者のどちらかに帰属させられる、自己に対して唯一のものではない情報を含んでいる。例えば、次のような性格特性や行為の場合である。自己も他者も内気である、自己も他者も求められて人差し指を上げることができる。さらに、対象—自己は、自己にただ偶然に関係する情報を含んでいる。例えば、顔の特徴。これらの特徴が自己に固有のものであるとしても、それらの特徴は自己それ自体の固有化をもたらすものではないだろう。というのは、同じ自己／非自己の区別は、それらの内容が変わるとしてもなされるからである。顔の特徴を変えるだけでは、あなたがあなた自身であることを止めることにはならないのである。したがって、対象—自己は、情報の非唯一的で偶然の内容によっては特定されない。それゆえ、対象—自己についての知識は、自己に特定のものではなく、人がその人の特異性 (singularity) にあるということ捉えるものではない。

この主張は、実際、認知脳科学の最近の研究成果と合致する。脳科学者 Perrine Ruby とともに、われわれは次のことを明らかにした。

- (i) 対象—自己の神経イメージ化研究において、医学的な前部前頭葉の大脳皮質だけでなく、より広いネットワーク（前楔状葉／背部帯状束、側頭頭頂部結合、側頭部端）も、活性化されることが繰り返し報告された。
- (ii) これらのすべての領域における自己の大脳の相関物は、他者の心的表象の大脳の相関物と重なる。
- (iii) このネットワークは、記憶の想起とコンテキストから生み出される情報を使う推論過程を含む一般的な認知活動のために強化もされる。
- (iv) したがって、これらの過程は、ただ偶然的に、そして非唯一的に対象—自己と関係付けられる。

理論レベルで明らかにされるように、この脳科学の研究成果は、自己に固有の知は、対象—自己を狙った過程においては見出されえないということを示唆している。このことは、単に科学的な知識についてのみ当てはまることではなくて、身体的自己が、意識の対象、

知識の対象、知覚の対象、内省の対象などとして取り上げられるいかなる実践に対しても当てはまるのである、と述べたい。それゆえに、問題は次のことである。対象—自己についての非自己固有の知識の獲得に限定されずに、その固有性における身体的自己のわれわれの理解が進展する方法はあるのだろうか。

4. 「誰？」ではなく「いかに？」

身体的主体に到達する何らかの方法があるとして、求められるのは、主体を意識のいかなる対象にも還元することを避ける所与性という全く別の様相である。主体—自己の所与性の様相をより良く理解するために、強調されなければならないことは、問題は、特定の何を問うことではなく、独特ないかに、を問うことである。それは、経験の特定のもの [対象] に関わるのではなく、所与性の独特の様相に関わることである (Zahavi 2005 : 204)。

言いかえれば、人が自分自身をいかに意識するかということは、その内容以上に、意識の構造に関わる問題なのである。このことは、自己意識の探求というわれわれの枠組みの興味深い変更を意味する。確かに、自己意識が探求されるときに、一般的に問われるのは、「何」あるいは「誰」である。あなたは誰を意識するのか。あなた自身か、それともそうでないか。あなたは何を意識するのか。あなたの顔の写真か、それとも誰か別の人の顔の写真か。私は違った枠組みを提示したい。すなわち、何／誰の問いは、対象—自己の意識と関わるときにおいてのみ意味を持つのであり、主体—自己の意識が問題になるときは意味を持たない。この論点は、いわゆる誤判定による間違いに対する耐性 (*immunity-to-error-through-misidentification*) と関係する。すなわち、次のように述べることは意味をなさない。「一つの経験がある、しかしそれを経験するのは私なのだろうか」「一つの行為がなされる、しかしその遂行を経験するのは私なのだろうか」「一つの視覚的知覚が生じている、しかし見ているのは私なのだろうか」など。

5. 透明な身体的主体

主体—自己を固有性においていかに意識するのかを理解するために、対象—自己の存在ではない存在の様相を明確化する必要がある。これには、透明性 (*transparency*) という概念が関係する。心の哲学においてこの概念がいかに使われてきたかを理解するために、小さな実験を試みよう。

「あなたのまなざしを内面に向け、あなたの内面の、経験の対象ではなく、経験そのものに意識を向けるようにしてみなさい。他の経験とは異なる、その経験の本質的な特徴、何かの経験だというのではない何かに注意を向けなさい。」(Tye 1995 : 30) Tye は「そんなことは不可能だ」と考える。「一般的に言って、あなたの知覚経験の内省は、あなたが経験する何かの側面のみを明らかにするように思われる。」(Ibid. : 136) それに従えば、経験の対象だけが明らかになるのであり、経験それ自体は経験から隠されてしまうという意味で、経験は透明だということになるだろう。その見方においては、「透明性は暗黙の一形態である。視覚的経験の現象学に関して言えば、透明性とは、われわれは何かを見ることはできない、なぜならばそれは透明であるから、ということになる。われわれは、窓を見るのではなく飛び立つ鳥を見るだけなのである」(Metzinger 2003 : 169)。したがって、現象的経験は、隠された窓を明らかにするようなものである。それは、その対象の所与性の様相を隠すことで、その対象をあらわにするのである。

しかし、経験のレベルそのものにおいては、現象の透明性という言い方は正しくない、と私は言いたい。経験はそれ自体が現象的経験の不明瞭な (*opaque*) 対象なのではない、という意味で透明であることは確かであるが、そのような透明性は不可視であること (*invisibility*) を意味するのではないし、より正確には、経験の透明性は、経験の不在 (*absence*) を意味するのではないのである。

例えば、透明な窓の後ろに一匹のクモが止まっているのをあなたが知覚することを考えてみよう。あなたは、毛におおわれた脚、体に描かれた幾何学模様様の複雑さなど、そのクモをまじまじと見る。そのとき、あなたは透明な窓そのものには注意を向けていない。窓を見るのではなく、窓を通して見ているのである。しかし、あなたの意識状態に与えられているものは、そのクモだけではなく、その透明な窓も、である。あなたは、窓の後ろのクモを知覚する。あなたは、それを通してクモを知覚するものとして、その窓を知覚する。あなたは、そのクモに近づこうとはしないだろう。あなたとクモを分離させる窓をあなたが経験しないならば、あなたはクモに近づこうと思うかもしれない。

つまり、透明性とは「通して見る」、より一般的に言えば「通して経験する」という経験を含むのである。その「通して経験する」という様相、経験の透明性は、その特定の主体—自己をあらわにする。主体は、まさに主体として、透明なものとして経験されるのである。すなわち、それによって何か別のものが別のものとし

て現れることなのである。(Heidegger 1995)

さらに、主体の透明性は身体的である、ということ
を述べたい。明白に(そして比喩的に)透明であると
経験されるのは、身体的主体である。それによって世界
の対象が別のものとして現れるという厳密な意味では
なく、より正確に言えば、主体の視野に主体の経験
を枠づけつなぎとめるということである。例えば、
「通りを渡ろうとしている女性は、カフェの前の歩道
に座っている男性よりも小さく見える」(Sartre 1969:
318[1943: 357]) という事実において、観察者の身体
は経験されるのである。つまり、その女性や男性の大
きさは、観察者自身の一透明な一身体的位置と関係が
あり、その位置を示すのである。この例が示すように、
透明なものとして経験される身体は、それ自体、世界
の経験を仲介したり遮断したりするだろう知覚対象と
して問題になるのではない。視野を遮る鼻の先は、こ
の意味では透明ではない。「透明な」身体とは、現れ
る世界によってそれ自身に示されるのであって、それ
ゆえに現存する対象でも不在の対象でもない。むしろ、
透明なものとして、身体は主体性において、経験され
るのである。

6. 志向的主体

ここでの重要な論点は、身体は、その境界を越えて
広がる空間に位置するものとして経験されるというこ
とである。その境界の中で、あるいはその境界上で、
感覚の局所性に依拠して経験されるといった単純なも
のではない (Legrand 2010a, 2011b, 2012b)。すなわち、
身体的な自己意識は、身体によって開かれる世界の経
験に対応するのであり、身体そのものの皮膚の境界を
越える。人が、物質世界に埋め込まれた物質的な主体
として自分自身をはっきりと経験するのは、世界にお
ける物質的对象の志向的经验によって人はまさに存在
を示されるからである、ということは今、われわれは
理解することができるのである。

「われわれは身体的主体性についての知を、どのよ
うに増やすことができるのか」ということで始めた問
いに答えるために、ここでなされる主張は、われわれ
が主体の固有性においてわれわれ自身について意識す
るのは、世界にわれわれが意識的に関与することによ
ってである、ということである。すなわち、原初
的なレベルでは、主体一自己の意識は、他者に対す
る主体の関係以外の何ものによっても与えられない
のである (Barbaras 2008 : 13)。この見方では、主体
は、「主体的な内的領域のようなものでは決してない」
(Heidegger 1927 : 241 [1982: : 170])。むしろ、主体一

自己についての意識は、外的世界の意識を通して「回
り道」をすることによって形をなすのであるが、実際
のところ、主体一自己に向かう近道などない (Barbaras
2008 : 111)。人は、主体一自己に対する意志を持つ
のであるが、外的世界に志向的に向けられているとい
う事実があるにもかかわらず、ではなく、志向的な方向
づけのおかげで、によるのである。

その志向性は、対立する方向を指し示す二つの意識
的な「身ぶり」によって、さらに特徴付けられる。す
なわち、手を伸ばす(主体から世界へ)と、指し示さ
れる(世界から主体へ)の二つである。Heidegger が
遠心力によって特徴付けられる「当企する」「主体」
を主張するのに対し、Sartre はそれと相補的な側面、
すなわち、「事物が指示する関係の中心」としての求
心力によって特徴付けられる主体を指摘する (Sartre
1956 : 320 [1943: 359])。その対立する方向性を越えて、
主体は、手を伸ばす対象によって主体に対して指し示
されるという意味で、これらの力は、意識の同じ行為
の二つの次元、同じコインの二つの側面ということに
なるだろう。「志向性は外部を目指すのであるが…そ
れは志向性が向かう点から何らかの形で生じるのであ
る」(Levinas 1969 : 129 [1961 : 136])。

7. 応答する主体と応答する他者

この志向性の反転は、主体という考え方に対して、
広範囲に及ぶ重要性を持っている。Waldenfels によ
れば、「志向的行為の背後に、著者あるいは起源とし
ての主体に帰せられて、われわれが経験する出来事
が現れる。それはわれわれに起こる何か、である」
(Waldenfels 2004 : 238)。この見方の帰結として、『主
体』というタイトルを持つ実体は、近代において、ま
ず受動者 (patient) として、そして応答者 (respondent)
として出現する。そして、先導者としてではなく文字
通り或る種の経験に従う何者かとして、Lacan と
Levinas が使う通常とは異なる意味において、従属さ
せられるものとして、私に関わる仕方で現れるのであ
る」(Waldenfels 2006 [2011 : 28])。

この見方において、私は、Line Ryberg Ingerslev 博
士とともに、研究を進めようとしている。そこでは、
主体はそれ自体与えられるものではなく、主体とは
異なるものによって主体に対して示されるものなの
である。ここで強調したいのは、他者の主体は主体
をそれ自身に示すものの中にあるということである。
これがいかに機能するかをより良く理解するために、
Waldenfels によって提示された応答性 (responsiveness)
の概念が、ここでは極めて重要である。それによれば、

特にいかなる対象にも還元されえない主体であることは、「＜他者＞の主張や要求によって選出されること」である (Waldenfels 2005 : 90)。というのは、対象とは異なる主体だけが、他者の要求に耳を傾け答えることができるからである。

応答するものとしての主体をさらに特徴付けるために、Waldenfels は、二つのことの違いを強調する。一つは、事物との交流のような情報の伝達を含む、何かに耳を傾け答えることであり、もう一つは、主体として呼びかけられ他の主体に応答として呼びかける、誰かに耳を傾け応答すること、である。その違いは、応答する主体の構成に見出される呼びかけ (address) という考え方の違いである。

呼びかけが生じるとき期待される応答は、主体が呼びかけることへの答えだけでなく、不平や難色をただ表現するというよりも、或る主体が他の主体に呼びかけていることをただ認知することでもある (Lacan)。他者に呼びかけることによって、主体が求める応答は、最低限そして根本的には、他の主体による、主体としてのその人の認知なのである。

8. 精神病理学 (神経性拒食症) における応答する身体

他者は、主体としての私を認知する必要があるならば、単純であるが重要な問いが生じる。私は、そのような応答を求めることを他者にどのように呼びかけるのか。いかに他者が私に応じられるようにするのか。二つの方法がある。話し言葉による方法と、身体による方法である。ここで問いが生じる。身体は、言語の使用をいかにもたすのかということと、言葉はいかに身体に影響を与えるのか、という問いである。私の研究では、この問題を、或る枠組みの中で問う。そこでは問題が複雑化させられ、すなわち臨床精神病理学で、次のように問われるのである。いかなる意味で、身体的徴候は、精神病理学において、話すことの様相すなわち他者に呼びかけることの様相と、見なされるのか。

私は、身体的徴候の多様性の中で、一つの精神病理学的状態すなわち神経性拒食症 (*anorexia nervosa*) に、焦点を合わせる (Legrand 2010b, 2010c, 2011a, 2012a, 2013; Legrand & Taramasco 2013)。特にこの状態に焦点を合わせるのは、それが、「生きた身体」と「生きている身体」すなわち、主体性における身体と物質性における身体の両方に、同時に関わる障害の明瞭なケースだからである。

物質性と主体性の両者が身体的主体を構成するので

あるが、神経性拒食症の主体は、主体性に対する物質性の過剰な支配に悩まされている。特に、「対象化」の過程である神経性拒食症での過剰な支配は、その次元の一つにすぎない物質化への身体への還元を引き起こす。それによって、多次元性という身体的主体性の基本的性格を破壊してしまうのである。例えば、体型と体重を自分自身と介護者の両方で測定するといった場合、神経性拒食症の主体は、自分の身体を主体性が奪われた一塊の物だと主張する。私は、そのような対象化が有害であるのは、それが主体の経験に物質性をもたらすからではなく、というのは、物質性は身体的主体性の通常形であるから、それが身体的物質性を非主体化するからである、ということを示したい。

それにもとづき、神経性拒食症における肥満に対する主体の抵抗が生じる最初の過程を明らかにする。その過程は、物質性が主体性から構成されていることを拒否し、その理由から失敗を余儀なくされる非物質化と、主体的なものとしての身体を破壊することを自指すのではなく保護しようとする、非主体化、単なる物への還元に対する戦い、の両者を含んでいる。

また、神経性拒食症におけるもう一つの過程も記述する。非主体化に対する戦いは、主体の物質性の再主体化の過程によって強化される。食物摂取、身体的活動と容貌の組織化を通して、物質性は主体化されるのである。文字通りに言えば、主体化の行為に従うことになる。この見方においては、従来の説明には失礼ながら、神経性拒食症は、物質性の単なる拒否ではなく、物質性の変容という行為によって特徴付けられるのである。

ここでの試みは、神経性拒食症の概念化を革新することであるが、臨床家たちによれば、それはより良き理解ということに留まっている。私は、神経性拒食症の主体が、身体破壊を行なうことで自己の保全をいかに論理的に行なうかを示したいと思っている。神経性拒食症のこの概念化では、私の意図は単に知的なものに留まっていない。自己破壊の一つの過程として神経性拒食症全体を拒否してしまうのではなく、その損害を与える範囲の限界を定めながらも、患者を励ます非主体化に対する戦いを育むことの可能性と有用性を論じることで、神経性拒食症の主体との臨床的な対応にも影響を与えたいと考えている。

さて、神経性拒食症で起こる身体変容が主体化の過程を含むのであれば、その身体変容は、他者の応答を求めるものとしてとりわけ他者に対して向けられた自己が露わになることと切り離すことはできないと、私は考える。その場合の他者の応答は、神経性拒食症で根本的に求められるもの、すなわちまさに主体性にお

ける主体を他者が認知することを表している。すべての形態から取り去られた身体を形成することによって、神経性拒食症の主体は、主体を観察者の立場から観察される対象に還元することを示す物質性のない、主体と主体の出会いを目指した、徹底的に主体化された物質性を、他者に対して呼びかけるだろう。

9. 精神病理学における応答する他者

しかしながら、この過程は、逆説的にも、神経性拒食症の主体を、耐えがたい立場、すなわち自己開示に対する他者の応答と結び付いた傷つきやすさの立場に置くことになる。したがって、他者が、神経性拒食症の主体とともに受け入れる立場は、極めて重要である。

特に臨床実践においては、特別なものとして扱われるのは、(例えば DSM (診断統計手引き) に基づいた精神医学における) 臨床医の観察位置、(例えば現象学的精神医学における) 患者自らの内省的立場、あるいは(例えば精神分析学における) 臨床医との患者の応答的立場、であろう。最初の二つの立場は、それぞれ、患者の生きている身体と生きられた身体に関わっている。しかしながら、後者の立場は、もっぱら言葉に意図的に依存したものであり、その立場は身体的徴候の具体的な物質性にいかに影響を与えるのかという問題を引き起こす。

身体を観察による対象化を避けるには、身体を診察室の外に引き出す必要はなく、むしろ、身体を応答するものとして受け入れることであるだろうと、私は考える。身体的徴候が他者への呼びかけの様相として「耳を傾けられ」、すなわち、他者との対話の様相、対象化する仕方でも観察されるのではなく、主体の提示として応答されるのであるならば、身体的徴候は応答する立場の中に差し挟まれ、それによって、主体の発話をも活性化させる対話の力に参加することになるのである。臨床医への話しかけが患者の身体にいかに関わり、かを理解させるのは、応答性に対する身体と言葉の両者の分節化なのである。

この私の研究は、言葉の身体的影響を理解するという挑戦でもある。精神分析学は「もっぱら言葉に依存し」、言語のような無意識に構造化されたものに焦点を合わせ、現象学は身体的自己意識の言語化以前の状態を記述することに優れているのであり、言語と身体の間断は、応答する主体性の哲学的解明としての現象学と、応答性の典型的な実践としての精神分析学の、両者の蓄積のおかげで克服されると、私は考える。さらに広く、私の現在の研究は、応答性が臨床実践において果たす役割の、特に身体に対して与える位置に焦

点を合わせての、現象学的探究に関わっているのである。

10. 終わりに：主体性の構造現象学

身体的主体性の観念とその探究は、何か一つの学問に属しているというのではない。この観念をいずれかの学問に固有のものとしてしまえば、その学問が何であれ、この観念の特性をつかみ損ねてしまうだろう。その特性とは、主体は、どのようなものであれ、一義的な規定を免れるものであるということにある。身体的主体性の探究の場を設定するのは、水をつかまえる技能に似ている。水をつかもうとして固くこぼしをにぎれば、水はこぼれてしまうが、開いた手のくぼみにわずかに残る。同様に、身体的主体性の多次元性は、いくつかの学問によって与えられる特定の特徴づけの間においてのみ把握されるものなのである。しかし、ここで取り上げられている主体性の観念が、一つの学問では十分に捉えられず、固定化された把握から滑り落ちるようなものであるとしても、そのことから、身体的主体性は探求の可能性を持ちえないと考えてしまうのは間違いだろう。全く逆に、身体的主体性がはつきりと刻まれる場が存在するのであり、私は、自分の研究においてそれを問題にしようとしているのである。作業仮説として次のように言うことができるだろう。すなわち、その場は、互いに異なる次元の間隙、距離、還元不可能性において存在し、それは身体的主体性の「多次元性」を証示するものである。

探究のこの「中間的な」場は、注意を払い続けるべき落とし穴に満ちている。一方で、ここで考えられていることは、自分自身の心理的・身体的経過に特別に内視鏡的に迫ることを可能にする主体の考え方に基くだろう内省的な方法ではない。他方、その方法は、個人の生きられた経験についてその本人がなす報告を、その主体によって「実際に」生きられただろう経験を説明するのにはそぐわない作り物として、認めない。内省的な主体と言葉にできない生きられた経験という考え方に与えられる認識に関わる特権は、どちらも、個人の「内面」における生きられた経験の、知的な意味ならびに空間的な具現化、そして、いわゆる「第一人称方法論」の支持者ならびに「主体を信用する」ことを拒否する批判者にも都合の良い、内面神話に依拠しているのである。これらの対立から離れて、この研究は、主体によって報告されることがらの正確性の問題は、個別に、主体とは何であるのか、特異なものとしての主体とは誰のことなのか、といったことを把握しようとするのではない場において生成するもの

である。もしも、主体とは、目標とされ、語られ、記述され、誰かによって分析される一つの対象であるとすれば、確かに、報告されることがらと、それを目指した報告を超えるだろう現実との間の正確性を確保することは妥当だろう。しかし、それは、今問題になっていることではない。もし、主体が経験することの中に現出するならば、私は現出すると考えるのであるが、それは、個別的な形で経験する主体であり、経験される対象、真偽が問題になって報告されるものとしてではない。主体は、経験することがらにおいて、どのような経験であっても経験するという行為によって、姿を現すのである。この議論は、Descartes に対しても妥当する。いかなる実体化以前に、したがって、Descartes の二元論とは離れて、何を疑うか、それが彼自身であったとしても、まさに疑うというその行為によって、主体はそれとして立ち現れるのである。

主体についてのこの考え方は、現象学的方法、とりわけ、その経験がいかに微細なものであったとしても経験のいかなる対象にも構造的に還元不可能な主体についての哲学的探究に、合致する。この見方においては、主体は、経験のまさに構造の一つの契機と考えられる。その構造とは、いかなる経験もその対象によって超えられるということであり、すなわち、それが経験の志向性である。そのような「構造現象学」は、内省的な心理学にとってかわられるような現象学とは対立するというだけでなく、経験の構造は形式的に推論されるが個別には経験されえないとするカントの思想とも対立する。そうではなくて、本論文で考察されたことは、主体が、個別的に、主体となりうる主体の現出の構造なのである。

[参考文献]

- Barbaras, R. 2008. *Introduction à une phénoménologie de la vie*. Paris: Vrin.
- Heidegger, M. 1955. Über die Sixtina, in: *Aus der Erfahrung des Denkens 1910-1976*, Frankfurt am Main, 1983, 119-121.
- Henry, M. 1975. *Philosophy and Phenomenology of the Body*. Tr. G. Etkorn. The Hague: Martinus Nijhoff [1965. *Philosophie et phénoménologie du corps : Essai sur l'ontologie Biranienne*. Paris : Presse Universitaire de France].
- Husserl, E. 1989. *Ideas Pertaining to a Pure Phenomenology and to a Phenomenological Philosophy – Second Book: Studies in the Phenomenology of Constitution*. Tr. R. Rojcewicz and A. Schuwer. Dordrecht: Kluwer [1952. *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, 2. Buch: Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*].
- Lacan, J. 1988. Freud's Papers on Technique. The Seminar, Book I N.Y.: Norton [1953-54. *Les écrits techniques de Freud. Le séminaire, Livre I*. Paris : Seuil. 1975].
- Legrand, D. & Ruby, P. (2009) What is self specific? A theoretical investigation and a critical review of neuroimaging results. *Psychological Review*, 116 (1) 252-282.
- Legrand, D. & Taramasco, C. (2013) Le paradoxe anorexique : quand le symptôme corporel s'adresse à l'autre. *L'Evolution Psychiatrique*. In Press.
- Legrand, D. (2005) Transparently oneself. A commentary on Metzinger, Being No One. *PSYCHE*, 11 (5).
- Legrand, D. (2006) The bodily self. The sensori-motor roots of pre-reflexive self-consciousness. *Phenomenology and the Cognitive Sciences* (5) 89-118.
- Legrand, D. (2007a) Pre-reflective self-consciousness: on being bodily in the world. Janus Head, Special Issue: *The Situated Body*. 9 (1) 493-519
- Legrand, D. (2007b) Pre-reflective self-consciousness: on being bodily in the world. Janus Head, Special Issue: *The Situated Body*. 9 (1) 493-519.
- Legrand, D. (2007c) Subjectivity and the body: Introducing basic forms of self-consciousness. *Consciousness and Cognition*, 16 (3) 577-582.
- Legrand, D. (2010a) Externalist naturalization of intention in action: an integrative interpretation. In: Grammont F, Legrand D and Livet P (Eds.) *Naturalizing Intention in Action. An interdisciplinary approach*. The MIT Press. pp.323-336.
- Legrand, D. (2010b) Myself with no body? Body, bodily-consciousness and self-consciousness. In: D. Schmicking, Daniel & S. Gallagher (Eds.) *Handbook of Phenomenology and Cognitive Science*. Springer. pp.181-200.
- Legrand, D. (2010c) Subjective and physical dimensions of bodily self-consciousness, and their dis-integration in anorexia nervosa. *Neuropsychologia*. 48, 726-737
- Legrand, D. (2011a) Ex-Nihilo: Forming a Body out of Nothing. *Collapse. Special Issue on Culinary Materialism*. Vol. VII. 499-558.
- Legrand, D. (2011b) Phenomenological dimensions of bodily self-consciousness. In: S. Gallagher (Ed.) *Oxford Handbook of the Self*. Oxford University Press. pp.204-227.
- Legrand, D. (2012a) M'êtré au monde : soi, objets et autres

- sujets dans l'anorexie mentale. *Le Cercle Herméneutique*, 18-19, 161-166.
- Legrand, D. (2012b) Self-Consciousness and World-Consciousness. In: D. Zahavi (Ed.) *Oxford Handbook of Contemporary Phenomenology*. Oxford University Press.
- Legrand, D. (2013) Inter-Subjectively Meaningful Symptoms in Anorexia. In: R. Thybo Jensen & D. Moran (Eds.) *Phenomenology of Embodiment – Intersubjective Embodiment. Contributions to Phenomenology vol.71*. Springer. pp.185-201.
- Levinas, E. 1969. *Totality and Infinity*. Tr. A. Lingis. Martinus Nijhoff Publishers and Duquesne University Press [1961. *Totalité et infini, Essai sur l'extériorité*. La Haye, Martinus Nijhoff].
- Levinas, E. 1987. *Time and the Other*. Tr. R. Cohen. Duquesne University Press [1947. *Le Temps et l'Autre*. Arthaud].
- Levinas, E. 1991. *Otherwise than Being or Beyond the Essence*. Tr. A. Lingis. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers [1974. *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*. La Haye : Martinus Nijhoff].
- Merleau-Ponty, M. 1962. *Phenomenology of Perception*. Tr. C. Smith. London: Routledge and Kegan Paul [1945. *Phénoménologie de la perception*. Paris: Gallimard].
- Metzinger, T. 2003. *Being No One. The Self-Model Theory of Subjectivity*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Sartre, J-P. 1956. *Being and Nothingness*. Tr. H. E. Barnes. New York: Philosophical Library [1943. *L'être et le néant*. Paris: Gallimard].
- Thompson, E. 2007. *Mind in Life: Biology, Phenomenology and the Sciences of the Mind*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Tye, M. 1995. *Ten problems of consciousness*. Cambridge, MA. The MIT Press.
- Waldenfels, B. 2004. Bodily Experience Between Selfhood and Otherness. *Phenomenology and the Cognitive Sciences* 3 (3):235-248.
- Waldenfels, B. 2005. Levinas on the Saying and the Said, in: E. S. Nelson, A. Kapust; K. Still, Hg., *Addressing Levinas*, Evanston, Ill.: Northwestern University Press.
- Waldenfels, B. 2006. *Grundmotive einer Phänomenologie des Fremden*, Frankfurt/M.: Suhrkamp [2011. *Phenomenology of the Alien: Basic Concepts*. Tr. von A. Kozin and T. Stähler. Evanston, Ill.: Northwestern University Press].
- Zahavi, D. 1999. *Self-Awareness and Alterity: A Phenomenological Investigation*. Evanston, Ill.: Northwestern University Press.

Zahavi, D. 2005. *Subjectivity and selfhood: Investigating the first-person perspective*. Cambridge, MA: MIT Press.

〔訳者附記〕

本稿は、Dorothee Legrand, “Who is the Human Being as a Bodily Subject?”の全訳である。Dorothee Legrand (ドロテー・ルグラン) は、2013年3月15日から9月14日までの6ヶ月間、広島大学大学院教育学研究科・学習開発学講座の外国人研究員(客員准教授)として広島大学に滞在した。学習開発学講座では、外国人研究員着任後、早い時期に講演会を開催することを慣例としている。自分の研究の背景や現在の研究の関心等を含んだ、研究者としての自己紹介的な講演であり、Legrandの講演会は、2013年4月18日に開催された。本稿の原型は、その講演会のために準備された英語論文の日本語訳である。後日、翻訳を本誌に寄稿するにあたり、Legrandは、もとの英語論文に加筆し、修正を加えている。講演会での演題は、“What is the Human Being as a Bodily Subject?”であったが、本稿では、WhatがWhoに替えられた。私は、講演会のために資料として日本語訳を準備し当日配布したが、上の事情により、講演会資料と本稿の間には若干の異同がある。オリジナルの英語論文は、まだどこにも発表されていない。

Dorothee Legrandは、臨床哲学、現象学と身体論を研究のフィールドとする新進気鋭の若手(1975年生)哲学者である。現在、フランス国立科学研究センター(Centre National de la Recherche Scientifique, France; CNRS)の研究員(第1級、第35セクション「哲学」)として活躍している。

本稿は、『学習開発学研究』の第7号(2014年)に掲載されるはずであった。その予定で準備を進めてきたが、私は、2013年12月に、脳血管疾患(脳出血)で倒れるという一大事に見まわれた。当然、作業はストップした。幸いに一命をとりとめ私は職場に復帰することができたが、左半身麻痺という後遺症を抱え、まさに本稿でのテーマ、身体的主体性に関わる重大な経験を持った。身体的主体としての私のアイデンティティをどう考えればいいのか。私の身体の可動性は大幅に制限され、数か月前の私と現在の私との間には、身体的主体としてアイデンティティの危機がある。おそらくLegrandが言う他者との応答性が、アイデンティティの維持を考える鍵であろう。このような実存的な経験の中にある私には、当初考えていた通常の「訳者解題」を、今、執筆する気持ちにはなれない。それに替えてこの附記を置くことにした。読者の皆さんには、

主体の身体性の問題を、これまでの現象学の議論を延長させて、さらに臨床的实践の具体的（＝身体的）問題に接続させようとする Legrand の論考を、丁寧に読んでいただきたいと思います。なお、多少煩わしい感が否めないが、英語論文での本文中のイタリックでの強調箇所には、日本語訳では傍点を付した。

『文化を生きる身体—間文化現象学試論—』（知泉書館、2004年）の著者、現象学者の山口一郎が、Waldenfels の *Das Leibliche Selbst: Vorlesungen zur*

Phänomenologie des Leibes, 2000 の訳本（山口一郎ほか訳『講義・身体の現象学—自己という身体—』知泉書館、2004年）の「監訳者あとがき」で、Waldenfels のこの著書は「メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』に続く、身体の現象学に関する画期的な著作」（447頁）と書いているが、Legrand の Waldenfels ならびに Levinas へのまなざしは、身体の現象学のこれからの示唆しているように思われる。